高崎学検定講座資料

令和５（2023）年６月10日（土）
高崎市市民活動センター・ソシアス

高崎城下町の遺跡を掘る

清水　豊（高崎市文化財保護課）

城下町とは何か

○領主の城館が中心にあり、家臣の屋敷、寺社や町人地（町屋）で構成される都市

1. 高崎城下町の範囲とその地形

○現在の地形：ほぼ平坦（段彩地図）
○旧地形（城下町成立前）：烏川左岸の河岸段丘があり、その東側に低地が広がる。

（1）　弥生時代
〔河岸段丘上〕　集落ができ、有力者の墓（方形周溝墓）もつくられる。
〔低地〕　今のところ、水田耕作の痕跡は認められない。

（2）　古墳時代
〔河岸段丘上〕　５～７世紀にかけて古墳が築造される。なかでも浅間山古墳（高崎市役所南側・高崎城三の丸遺跡で報告）は、江戸時代の絵図に「浅間山」として描かれ、前方後円墳の可能性がある。
〔低地〕　部分的に水田耕作の痕跡を認める。

（3）　奈良・平安時代　～　1108（嘉承３/天仁元）年
〔河岸段丘上〕　集落がつくられる。
瓦が多く出土し、古代寺院の存在が指摘される。
〔低地〕　広い範囲で水田跡が発見されている。

（4）　戦国時代（天文21（1552）年以前）
〔河岸段丘上〕「和田城」や興禅寺があり、鎌倉街道上道が通っていた。
〔低地〕　寺院が点在する。発掘調査では水田耕作の痕跡は認められないが、古図をみると水田の表記がある。

1-1　城下町がつくられた場所は「低地（水田耕作地）」

【疑問】城下町の造成工事にあたり、埋土（盛土）造成はないのだろうか？

〔現時点での解釈〕

・城下町の発掘調査：その成立段階で、盛土造成の痕跡は確認できない。

・12 世紀初頭（1108 年）の浅間山噴火で軽石が厚く堆積。

⇒被災後、水田耕地の復旧はない（畑作地に転換の可能性）。

⇒テフラ堆積で水田耕地が「高燥化」し、盛り土の必要はなかった。

＊【参考】「地層累重の法則（ステノ＝スミスの法則）

・重なり合う２つの地層は下にある地層のほうが、上にある地層より古い。

2.城下町の成立過程

(1)縄張りの起点

・古記録をみる『高崎誌』－連雀町

「(前略) この地高崎の中央なれば、慶長３年城下町割の縄張ありし時、最初にこの町の所居を定め、其れより南北総町の地割をなせしと也。其時標に立てたる大石、近き頃迄衢の北角にあり、この町を中央と定める故に、北方田町にては南を上とし、南新町にては北を上とするなり。(後略)」

○「大石」⇒　城下町設計、測量の「標石」

＊【参考】和田三石：和田城築造の際の「標石」と指摘（清水 2016）

〈参考〉

「高崎市道道路元標」（連雀町）

・道路の起終点を示す標識。

＊旧道路法（1919 年）に基づき、各市町村に 1 個設置。

(2)「縦町」と「横町」－『高崎志』－連雀町

「(前略)この町は東西の町にして、昔は大手前より今の升形木戸の間を１丁目とし、それより東大道の間を２丁目とし、またそれより東、通町境に至る迄を３丁目とす(後略)」

○縦町型地割…城がある方向を主軸にした道に面し、町屋の正面が向く。
⇒城を頂点とした武家地に備わる求心的な秩序に、町人地が従う(宮本 2000)。

○横町型地割…街道筋に面し町並みが広がる。
⇒立地によって秩序が生じない地割。

(3)箕輪から移転した町と寺社

○町

⇒連雀町（慶長３）、田町（慶長３）、椿町（本町：慶長３）、鞘町（慶長年中）、新紺屋町（由来不詳）、鍛冶町（由来不詳）、本紺屋町（慶長年中）、磬撃町（慶長４）。

○寺社

⇒石上寺（慶長３）、龍廣寺（慶長４）、慈上寺、正法寺（文禄２）、大雲寺（慶長４）、法華寺（慶長３・４年）、恵徳寺（慶長３）、諏訪神社（慶長４）、延養寺(-)、諏訪神社（金剛寺(-)）、庚申堂（1470）、安国寺（慶長年中）、大信寺（慶長のはじめ）

(4)街道整備―『高崎志』

「(前略）通町は昔の本道にして、此町は城中より通町に出る大道也、今の本道はその頃は横町と呼びしと也(後略)」

３．城下町の遺跡を掘る

(1) 遠構－真町遺跡・羅漢町遺跡

①古記録の記述－(『高崎志』羅漢町)

「羅漢町は通町通り東にあり、昔は五百羅漢町と云しを、今は略して羅漢町と呼ぶ也、由来不詳、法輪寺の山号に拠りて名づけしか、又町名に因みて山号とせしか知ることはできない。此の町も南北の通り也

＊法輪寺：羅漢山正覚院

②古記録の記述－遠構

a)『高崎寿奈子』

・「町惣構の堀あり。長松寺裏脇より町々の裏を通り終りは龍広寺下迄也。町々へ出入の口７か所。」

b)『高崎志』

・「高崎城の総構は、昔赤坂町長松寺の後より、東江木新田に至り、それより南に折て、通町の東より職人町の南に折、又西に折て、竜広寺の門前に至まで、土堤を築き、松杉榎など植たりと云、今は民家多く建つつきて、其土堤なし、但通町の南より職人町の東に至まで土堤ありて、松杉など生たり、土俗これを遠構と称す」

②発掘調査でわかったこと

a)遠構

○堀跡

・規格：幅５．２m、深さ１．５m。

・埋土をみると浅間A軽石の真上に、崩落した「盛土」が堆積する。

・堀底に「砂」が堆積し、水の流れがあった。

＊浅間山噴火後に土塁は取り壊され、18世紀後半には堀の規模は減少。

「遠御構筋絵図（文化10・1813）年」

＊土塁の着色がなく、御組長屋の建物が描かれる。

⇒19世紀前半に部分的に土塁はない。

＊堀を埋める土から馬の歯骨の出土が目立つ（真町遺跡）。

⇒近隣に馬に関連する施設の存在。

＊土塁があった場所に墓が作られている（羅漢町遺跡）

⇒17世紀後半以降の段階で土塁はない。

b)墓地

○３５基の木棺墓を確認(17世紀後半～19世紀)

・短軸：４０～５０cm、長軸：５０cm前後、高さ：６０cm

・棺の材質は「マツ属」が多い。そのほか、スギ、カヤ、ヒノキ属

・29体の人骨（成人：28体、７～8歳：1体）

・推定身長　男性：１５２cm～１６４cm　女性：１４５cm～１５６cm

＊江戸時代の平均身長　男性１５７．１cm、女性１４５．６cm

(2) 高級磁器の出土－桧物町遺跡

① 古記録の記述（『高崎志』）

「檜物町は枡形木戸外、南の町也、由来知らず、昔桧物師多く住し故に、名づくと也」

② 発掘調査でわかったこと

○鍋島焼が出土

＊「鍋島焼」佐賀藩の藩窯でつくられた製品。伝承では寛永５(1628)年に窯が開かれ、製品の多くは将軍や大名家への献上品であった。

【出土した資料】

○芙蓉文染付皿：７寸（口径 21 cm)、後期鍋島（１９世紀前葉頃）

＊その年代藩主：14 代輝延（1800～1825）15 代輝承（1825～1839）
16 代輝徳（1839～1840）

＊サイズや絵柄が近似する皿が前橋城から出土している。

〔現時点での考え〕

○江戸遺跡：後期鍋島の段階で、下級武士や町人地で出土する事例がある。

・遊興地（料理屋）とのかかわりが指摘されている。

【仮説】

・桧物町には、名主就任披露の会場となるような場所(料理屋)があり、そこでの所有も考えられる。

＊献上や贈与された保有者から下賜・譲渡などの理由で、所有者が変更(市場に流通か)した可能性も。

(3) 大信寺門前の発掘－連雀町遺跡

①古記録の記述－『高崎志』

「慶長３年戊戌箕輪より此に移る」

「城主より命じて大手門前に置く」

「今に至る迄、此町を総町の第一二に置く」

【発掘調査でわかったこと】

a)大信寺門前北側に側溝を確認

・10 号溝：上幅３m、深さ１．５m

・側溝が掘削されたのは 17 世紀後半～末頃

・溝底から「元禄 14（1701）年」の墨書が残る焼き物が出土

＊堀を整備してから 100 年間で約１m埋没している。

〈参考〉城下町の環境問題（ゴミ対策）

・藩では役人を巡回させ、不法投棄の取り締まりを行う。

＊用水への投棄や、定められた町内以外の者の投棄

＊違反者から過怠銭をとり、ゴミ運搬の費用に充てる。

●塵捨て場の場所（５箇所）

・通町出口、羅漢町出口、江木新田出口、本町裏、烏川河原

＊寛政９（1797）年　通町・連雀町・新町・砂賀町の通町口から出た塵の焼却場は新後閑村にあったが、周辺にある畑農作物への影響を考慮し、烏川河原へ捨てるよう変更した。

b)大坂式の瓦が出土

●桟瓦

・「大坂瓦師　北の長兵衛」と刻印がある、

＊特定の建物に使用するため目的的に持ち込まれた可能性があるが、現段階では数量が少なくその搬入経緯は不明。

〈参考〉

・桟瓦の発明：延宝２（1674)年、近江国三井寺の瓦工人

・本格的に使用されるのは、「１８世紀後半～」

・重量が軽く、安価に設定でき、商家にも広く使用される。

c)胎児の墓（７～８カ月の全身骨格）

・71×43 cmの楕円形。

・鉄釘が 30 本以上出土⇒木棺に納められていた。

・時代は 19 世紀前葉～中葉

・貝灰の純層が「土饅頭状」に盛り上がった状態で確認された。

(4) 刀装具職人の痕跡－宮元町遺跡

【発掘調査で分かったこと】

a)平安時代には水田として土地利用されている

・浅間 B 軽石（As-B）降下後、水田が復旧された様子はない。

⇒　畑に耕作転換した可能性がある。

b)中世期の溝を発見した

・この溝と近世高崎城下町の地割の主軸は異なる。

⇒城下町の設計は、それ以前の地割を踏襲せず新たにデザインしている。

〈参考〉

・高崎城絵図をみると、本丸―二の丸堀の軸は近似しているが、三の丸堀の軸はそれと異なる。二の丸までは、和田城の掘割を利用している。

C)刀に関連する遺物が多数出土

・木製鞘、切羽、目貫

・金属加工時に使用する坩堝（カワラケを転用）に付着した金属の分析

*加工した金属は、分析の結果「青銅・真鍮」とわかった。

⇒鞘師、柄師の存在が考古資料で立証できた。

〈参考〉

□近世高崎職業案内抜粋

（近藤 1992）

鞘町	年号	西暦	職業名					
高崎寿奈子	宝暦５	1755	鞘研	柄巻	金具師	質屋	造酒屋	青物干物
高崎志	寛政元	1789	鞘師	研師				
柳下町奉行日誌	寛政４	1792	鐘つき	造酒				
柳下町奉行日誌	寛政９	1797	細工職	八百屋				
更生高崎旧事記	明治期		鞘師	柄師	研師			

〇鞘師：刀剣の鞘をつくる職人。鞘下地や白鞘を制作する。

＊鞘塗は塗師、柄巻きは柄巻師に分業した。

〇柄巻師：刀剣の柄に柄巻きを施す職人。

【メモ】

【この講座にあたり参考にした文献】

〔古記録〕

『高崎寿奈子』　宝暦 5（1755）年

『高崎志』　寛政元（1789）年

『更生高崎旧事記』　明治 15（1882)年

〔発掘調査報告書〕

高崎市教育委員会(1993)『高崎城下町遺跡』

高崎市教育委員会(1999)『真町Ⅱ遺跡』

高崎市教育委員会（2001)『旭町遺跡』

高崎市教育委員会（2002)『真町Ⅲ・旭町Ⅳ・弓町Ⅰ遺跡』

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団(2011)『羅漢町遺跡』

高崎市教育委員会(2013)『あら町遺跡』

高崎市教育委員会(2016)『連雀町遺跡』

高崎市教育委員会(2023)『宮元町遺跡』

〔市町村誌〕

高崎市(平成 14)『マチの生活と民俗の変化－商人・職員・町並み・生活』

高崎市（平成 18)『高崎市史資料集１　高崎城絵図―「櫻井一雄家文書」を中心に―』

〔展示会図録〕

清水豊編(2005)『高崎藩の考古学』かみつけの里博物館

〔論文〕

関戸明子　奥土居尚（1996)「高崎城下町の形成過程と地域構成」『歴史地理学』180　歴史地理学会

時枝務（2002)「城下町高崎の都市プラン」『マチの生活と民俗の変化　商店・職人・町並み・生活』高崎市史民俗調査報告第８集　高崎市

清水豊（2016)「和田城並びに興禅寺境内古地図を読み解く」『群馬文化』第 327 号　群馬県地域文化研究協議会

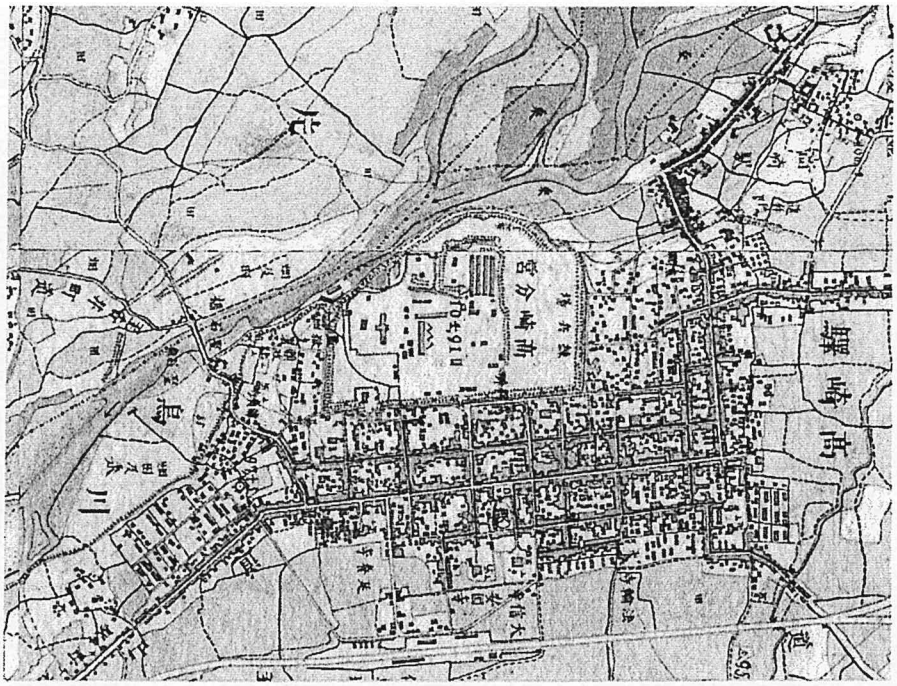
〔一般書〕

高崎市教育委員会(1993)『資料は語る－近世高崎の庶民文化』

松本四郎（2013）日本歴史叢書『城下町』吉川弘文館

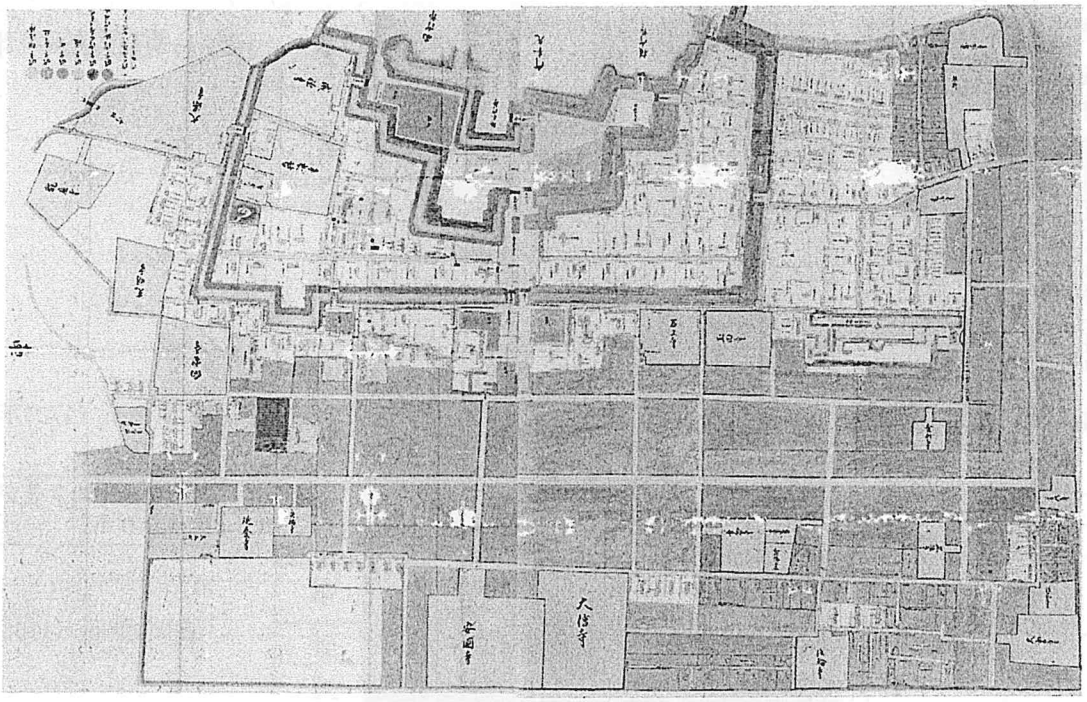
明治期迅速測図
（陸軍参謀本部陸地部測量部）二万分の一

南

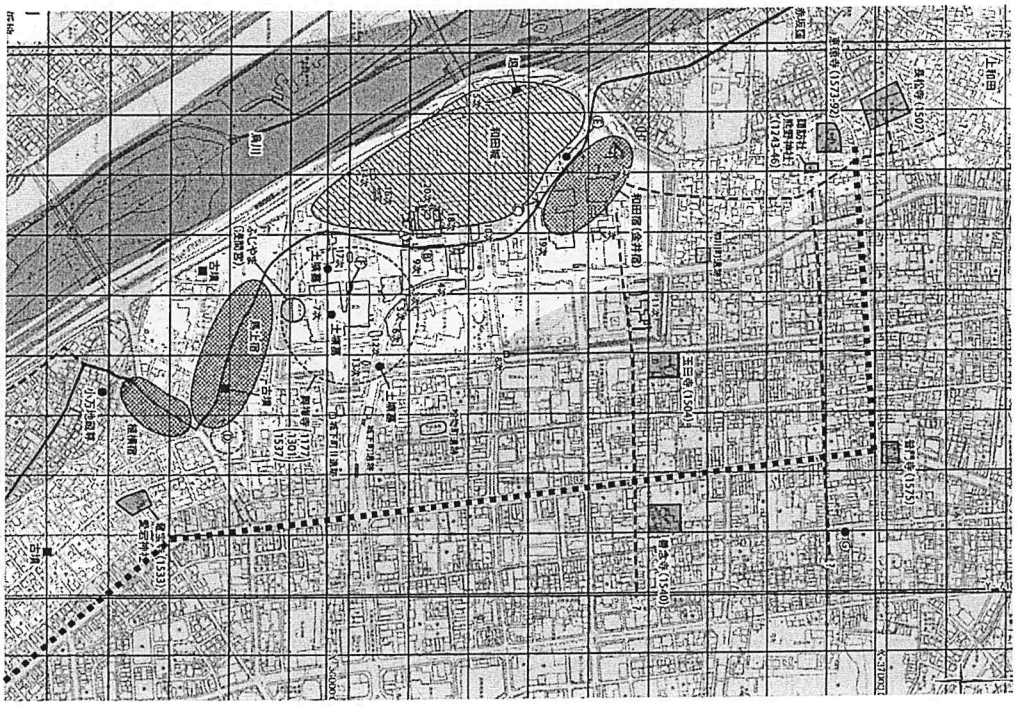


北

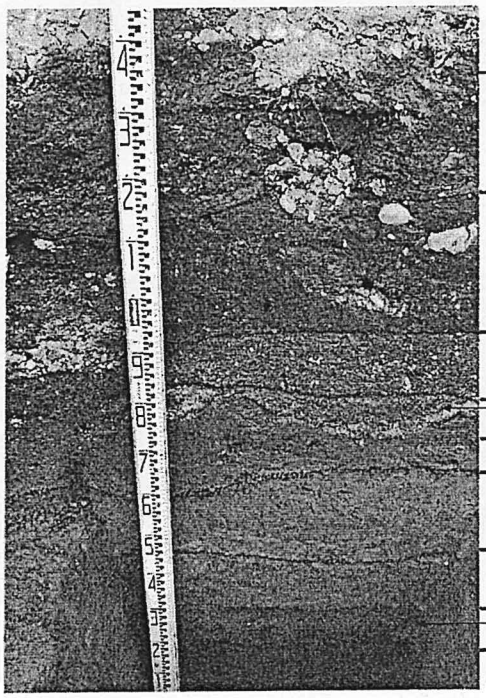
御城内外惣絵図　文化7年6月（一八二四）　一九九年前



南



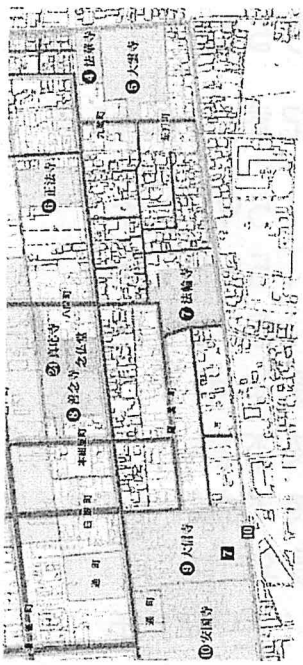
北

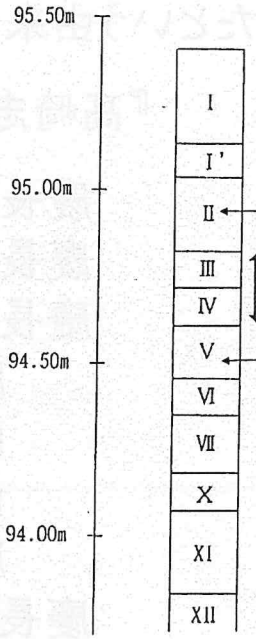


あら町遺跡の地層

粘質で鉄分の沈着が認められる。

羅漢町遺跡の地層





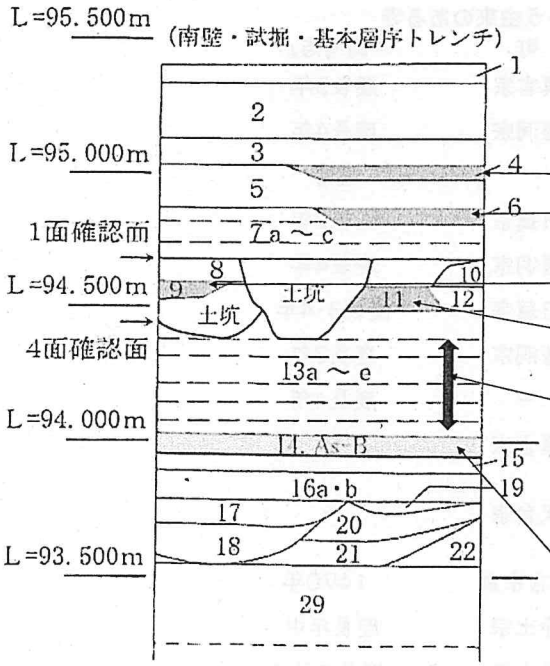
浅間A軽石(1783)年を含む

榛名二ツ岳テフラ（Hr-FA）を含む
６世紀初頭

Ⅲ層　粘性があり、炭化物を僅かに含む。

Ⅳ層　やや砂質で、粘性がある。

連雀町遺跡の地層



昭和26年　もしくは　明治36年

明治13年　もしくは　明治36年

1807　もしくは　1812年

1724～27年頃

13a～e層

・13a　黄褐色粒少量、しまり強い。
・13c　粘性ややあり、均質
・13e　As-B多量

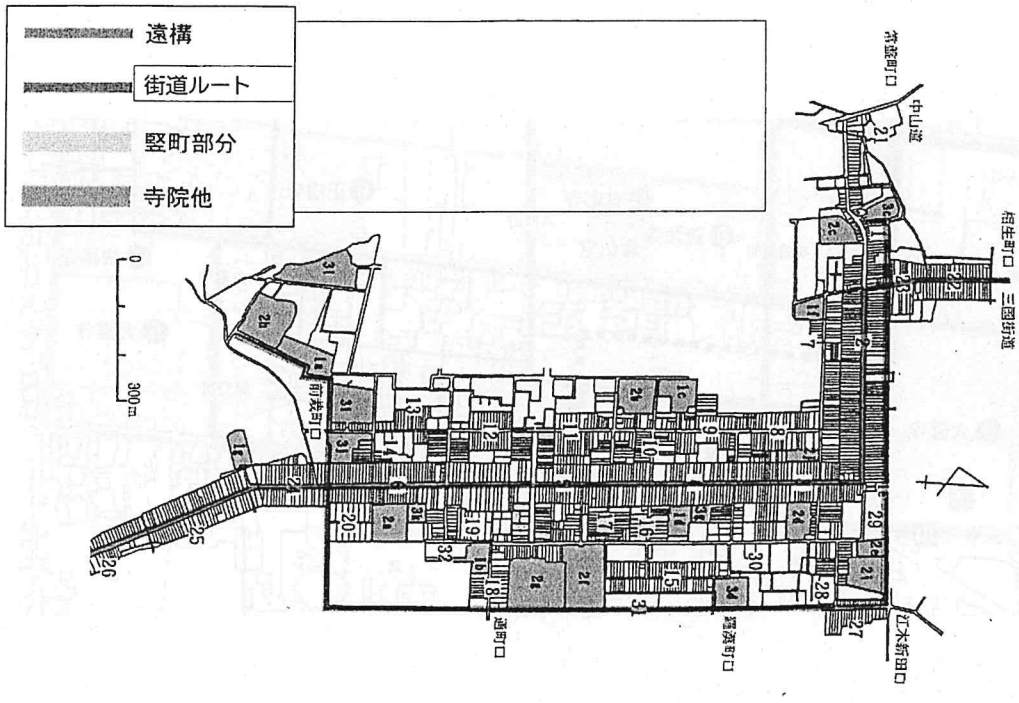
浅間B軽石：1108年

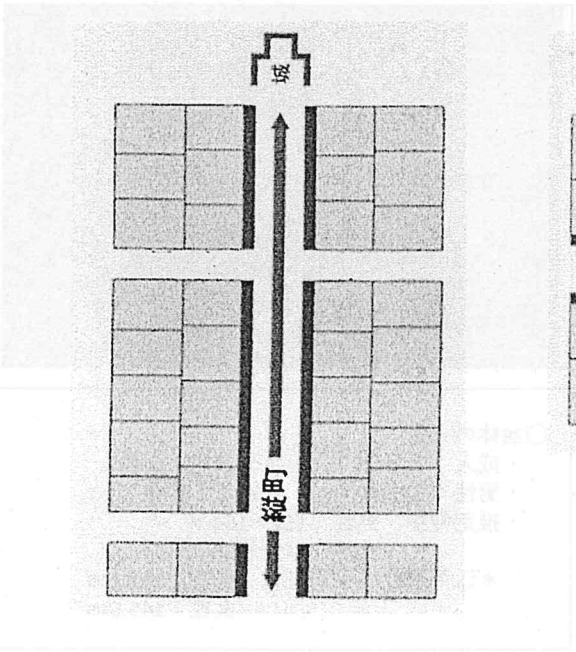
箕輪から移ったという由来のある町

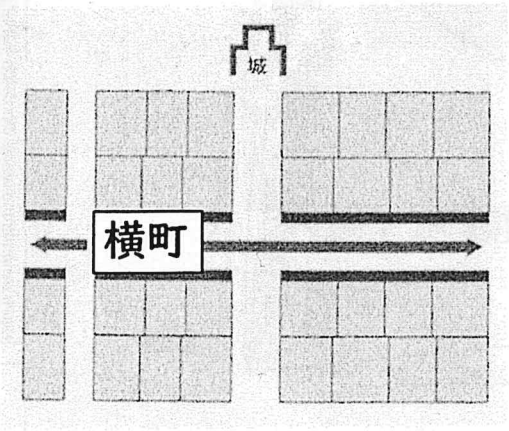
町名	『高崎志』記載の移転年
連雀町	慶長3(1598)年
田町	慶長3(1598)年
本町(椿町)	慶長3(1598)年
鞘町	慶長年中
新紺屋町	由来不詳
鍛冶町	由来不詳
本紺屋町	慶長年中
鉦打町(磬撃町)	慶長4(1599)年

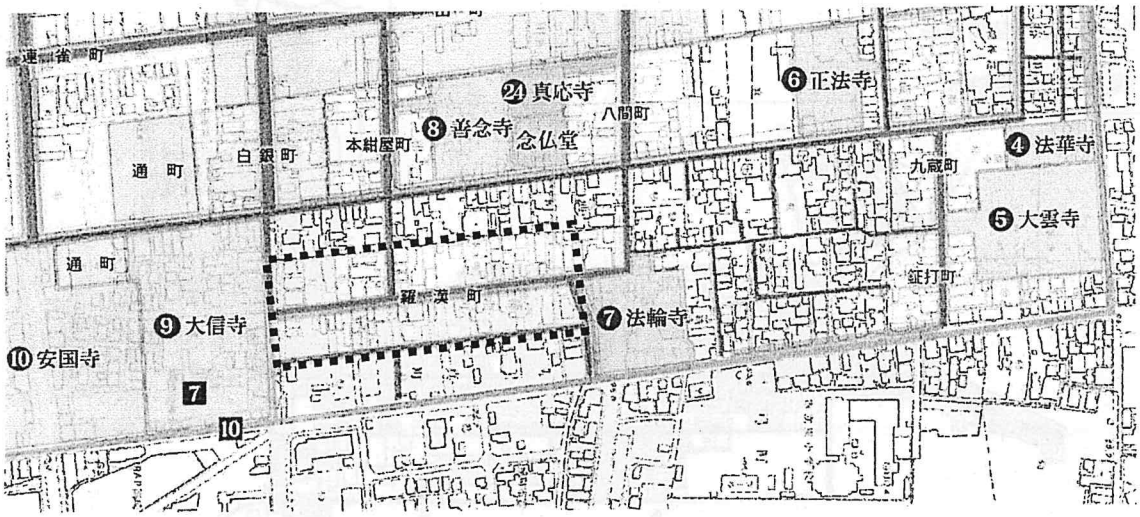
●箕輪城城下町から移ったという由来のある寺

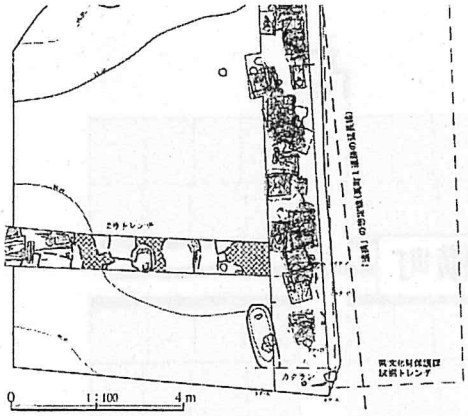
寺名	町	『高崎志』
石上(せきじょう)寺	真言宗	慶長3年
龍廣(りゅうこう)寺	曹洞宗	慶長4年
慈上(じじょう)寺	ー	廃寺
正法(しょうぼう)寺	日蓮宗	文禄2年
大雲(だいうん)寺	曹洞宗	慶長4年
法華(ほっけ)寺	日蓮宗	慶長3・4年
恵徳(えとく)寺	曹洞宗	慶長3年
諏訪神社(諏方明神)	ー	慶長4年
延養(えんよう)寺	真言宗	ー
諏訪(すわ)神社(諏訪明神) 金剛(こんごう)寺	天台宗	ー
庚申堂(こうしんどう)・庚申寺	真言宗系	1470年
安国(あんこく)寺	浄土宗	慶長年中
大信(だいしん)寺	浄土宗	慶長の始め

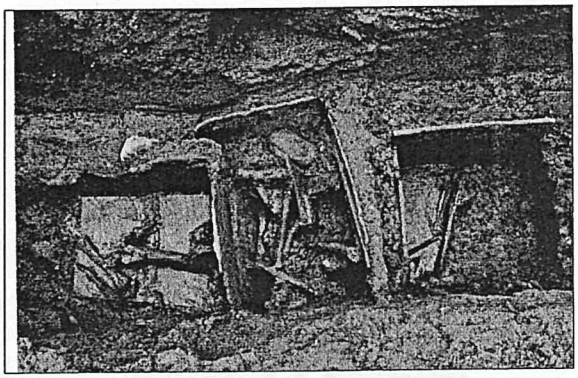

遠構
街道ルート
竪町部分
寺院他
中山道
三国街道
江本新田口
福渡町口
遠町口
前橋町口
0
300m


城
竪町


城
横町







○木棺墓　３５基

・短軸：40～50cm、長軸：50cm前後　高さ：60cm

・材質は、マツ属が多い。スギ、カヤ、ヒノキ属

・17世紀後半～19世紀中葉

○29体の人骨

・成人：２８体　、　７～８歳：１体

・男性：１５体　、　女性：１４体

・推定伸長　男性：152～164cm

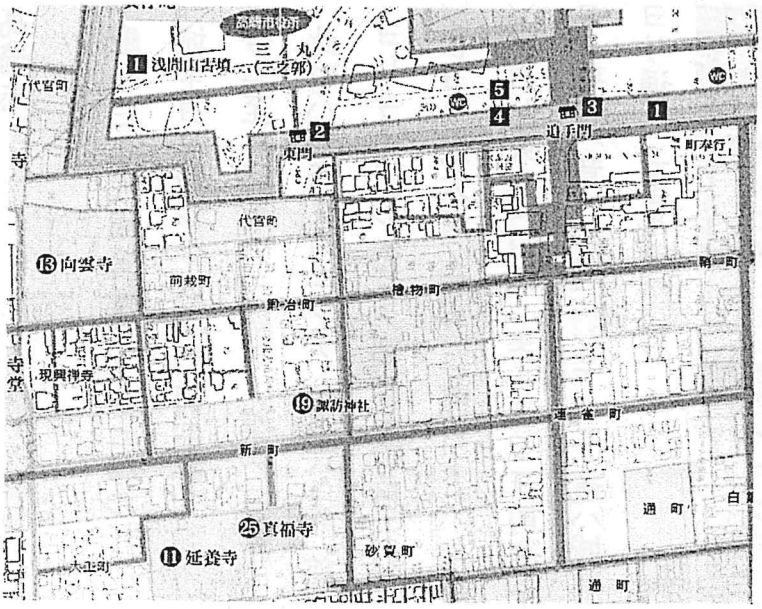
女性：145～156cm

＊江戸時代の平均身長　男性：157.1cm

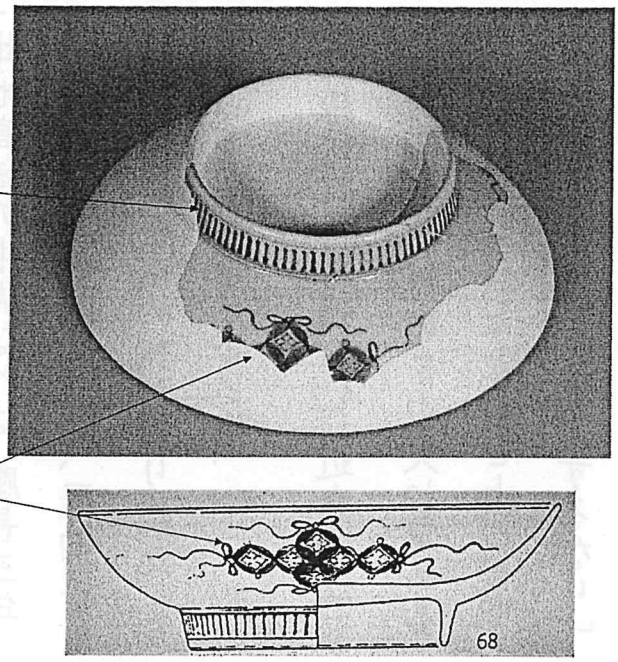
女性：145.6cm

『高崎志』

「檜物町は升形木戸外、
南の町也、由来知らず、
昔桧物師多く住し故に、名ずくと也」

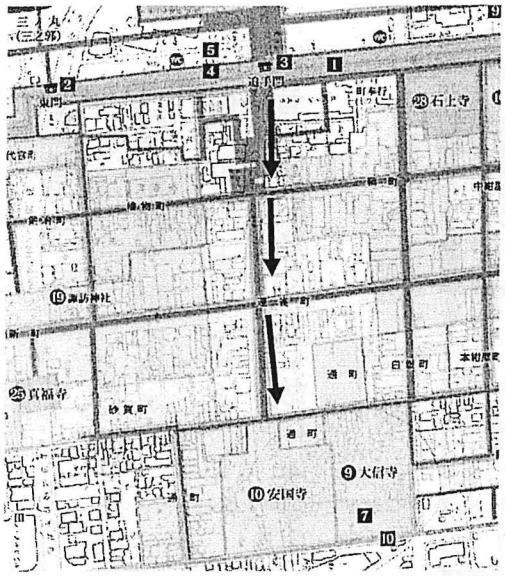


後期　19世紀前半



『高崎志』

「慶長三年戊戌箕輪ヨリ此ニ移ル」
「城主ヨリ命シテ大手門前ニ置」
「今ニ至ル迄此町ヲ総町ノ第一ニ置」
「此町ハ東西ノ町ニシテ、昔ハ大手門前ヨリ今ノ枡形木戸ノ間ヲ一町目トシソレヨリ東大道ノ間ヲ二町目トシ、マタソレヨリ東、通町境ニ至ル迄ヲ三町目トス、通町ハ昔ノ本道ニシテ、コノ道ハ城中ヨリ通町ニ出ル大道也」

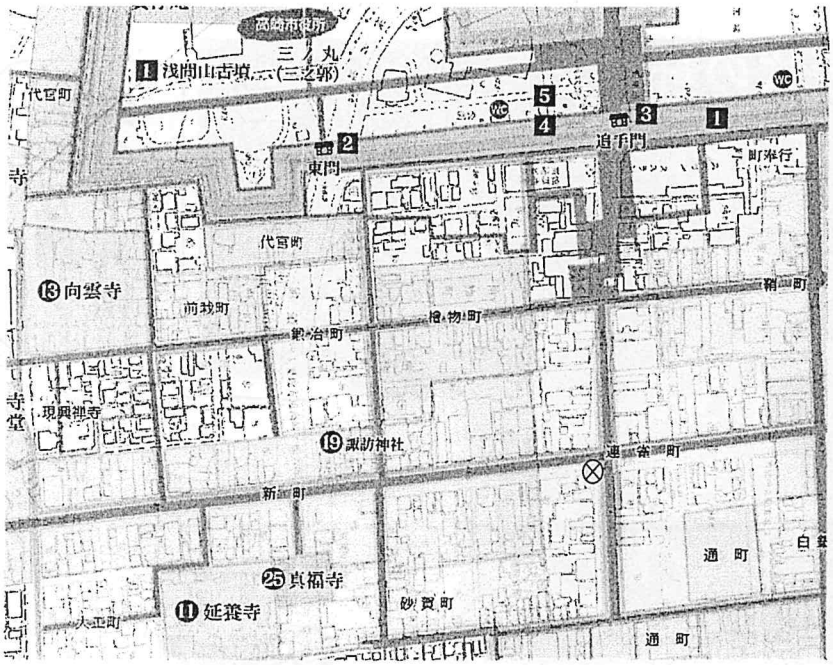


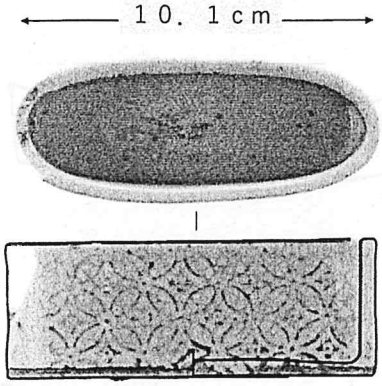
「此地高崎の中央なれば、慶長三年城下町割の縄張ありし時、最初に此町の所居を定め其れより南北総町の地割をなせしと也、其時標に立たる大石、近き頃迄の北角にあり、此町を中央と定める故に、北方田町にては南を上とし、南方新町にては北を上とするなり」

道路元標

・道路の起終点を示す標識

・旧道路法（一九一九）に基づき、各市町村に1個設置すること





10号溝の最下層から出土した
鬢水入れ（鬢盥　ひんだらい）

鬢付油や整髪料をいれ髪をすくための櫛を浸す容器。

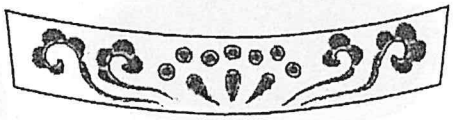
元禄十四年
（辛）巳七月廿日かへ申候　清吉

元禄十四年　1701年

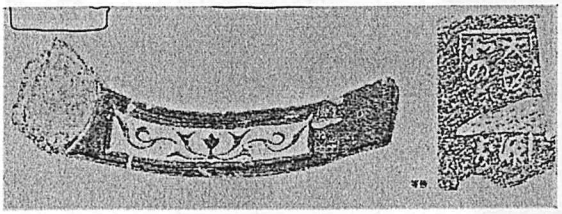
・溝の掘削は18世紀初頭以前
⇓
17世紀後半～末ごろ作られた

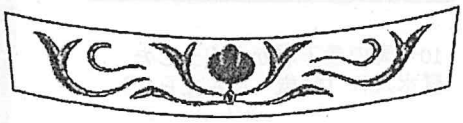
大坂瓦師
北の十兵衛

江戸式



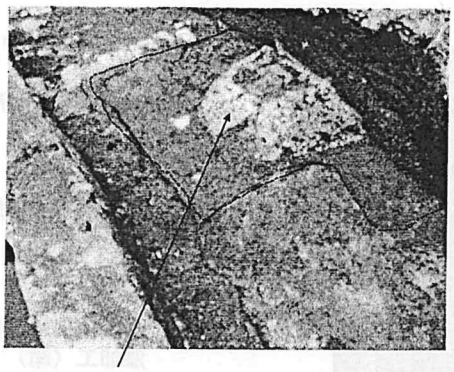
東海式

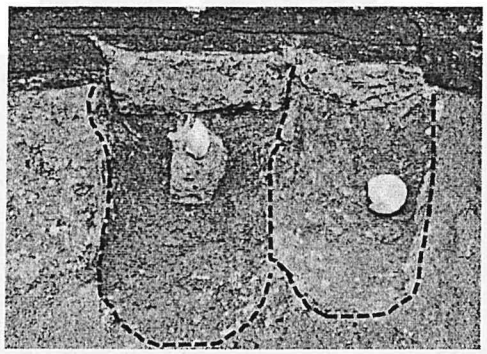




大坂式

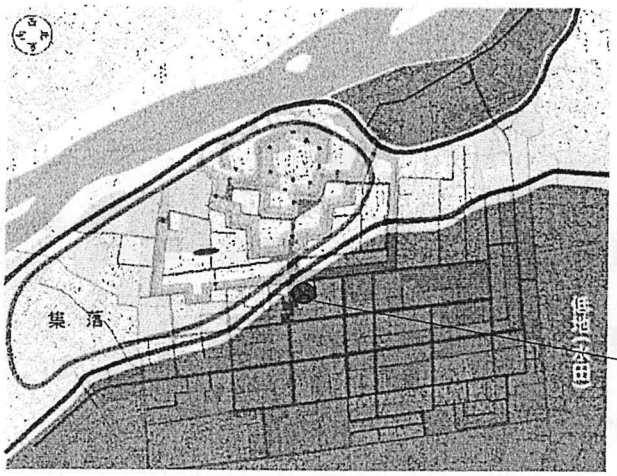
・桟瓦の発明　延宝2(1674)年　近江邦三井寺の瓦工人
・本格的に使用されるのは、「18世紀後半」
・重量が軽く、安価に設定でき、商家にも広く使用される。

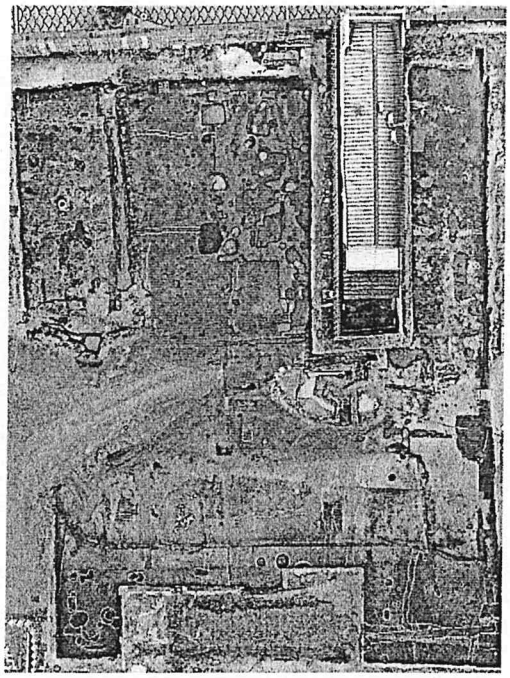




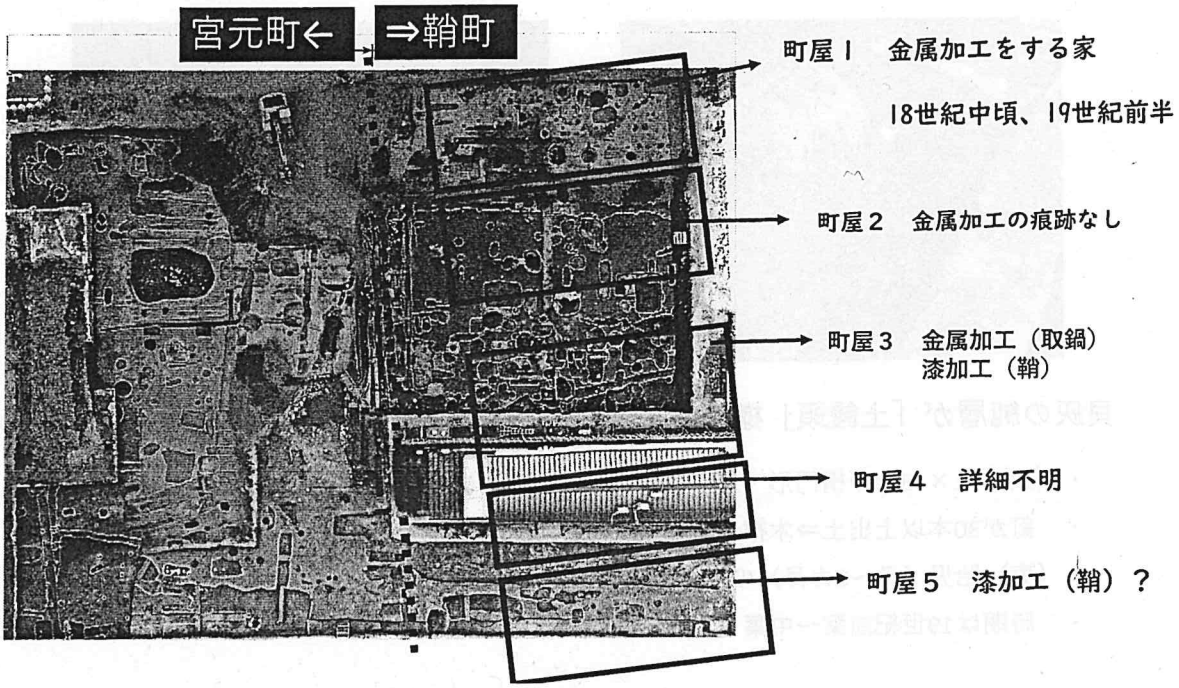
貝灰の純層が「土饅頭」様に盛り上がった状態で確認された（上面を黒色土で覆う）。

- （東）71×43cmの楕円形　深さは17cm　　（西）62×31cmの楕円形、深さは11cm
- 釘が30本以上出土⇒木棺に納められていた。
- （東）胎児（７～8カ月）の全身骨格が出土
- 時期は19世紀前葉～中葉





１１０８年の地表面に残る水田のアゼ



□近世高崎職業案内抜粋

鞘町	年号	西暦	職業名					
高崎寿奈子	宝暦５	1755	鞘研	柄巻	金具師	質屋	造酒屋	青物干物
高崎志	寛政元	1789	鞘師	研師				
柳下町奉行日誌	寛政４	1792	鐘つき	造酒				
柳下町奉行日誌	寛政９	1797	細工職	八百屋				
更生高崎旧事記	明治期		鞘師	柄師	研師			